RESEARCH FRONT

尾鷲の魅力を伝える古文書を町おこしの出発点に

人文学部教授
塚本 明

つかもとあきら
文学修士
専門分野は、江戸時代史
1960年生まれ

文化遺産と自然資源に恵まれた、三重県尾鷲市。
代表的な歴史的文化財に、学界でも注目される『尾鷲組大庄屋文書』があり、
三重大学人文学部や市民グループを中心に、
調査・保存事業が進められています。
古文書が伝える地域の価値を、いかに住民に知らせ地域の活性化につなげるか。
調査だけにとどまらない新たな役割も、大学は担っています。

調査風景

江戸の歴史遺産が豊かな町・尾鷲

津から車を飛ばして約2時間でたどり着く尾鷲は、雇用難による若年齢人口の流出と深刻な財政難に悩み苦しむ地である。だが、現在の経済状況とほとんど対照的に、歴史的な文化遺産は極めて豊富で、特に江戸時代の歴史を考える上では大変魅力的な地域でもある。現在、私たちは尾鷲市立中央公民館郷土資料室に架蔵される『尾鷲組大庄屋文書』の調査・保存事業を進め、文化活動を通じた地域の活性化、大学と地域社会との連携の推進を図っている。

調査風景

尾鷲全景

熊野古道・八鬼山峠の石造物

尾鷲組大庄屋文書

学官民で『尾鷲組大庄屋文書』を調査

『尾鷲組大庄屋文書』は、江戸時代の尾鷲組14ヵ村（現在の尾鷲市の大半を占める）の代表＝大庄屋の役所に遺された古文書で、その価値は全国的にも注目され、三重県の文化財指定も受けている。過去には売却・散逸の危機にさらされたが郷土史家の奔走により守られ、また1960年代には三重大学学芸学部の中田四朗氏による調査が行われた。だがその量はあまりに多く、1万点以上の一紙物文書が未整理のまま40年近くの時が過ぎた。3年前から三重県史編さん室の協力を仰ぎつつ、ゼミ生と尾鷲の市民グループ「尾鷲古文書の会」と合同で調査活動を行っている。現在、約6,000点の整理が終了した。

海・山・港に恵まれた地域

江戸時代の民衆の歴史は、これまで稲作農耕民を中心に描かれてきた。江戸時代が米の生産高を基準に築かれた社会であり、農民人口の占める割合が圧倒的に多かったからである。だが、中世史家の網野善彦が情熱的に論じたように、日本社会は農耕民によってのみ成り立っていたわけではない。近年、町人や漁民、林業の歴史についての研究が進展していることは、こうした反省にも立っている。だが通常は町、漁村、山村が個別に分析され、それらの相互関係にまで検討が及ぶことはない。

尾鷲は、これらの要素が全て揃う地である。江戸時代に物資の輸送は海路が中心であった。上方市場と江戸とを結ぶ廻船は、尾鷲の港に頻繁に往き来し、紀州の産物の取引も活発であった。尾鷲の漁民が獲った魚は伊勢の河崎や尾張の熱田などへも運ばれ、諸国からの参詣人の胃袋を充たした。「尾鷲ヒノキ」としてブランド化した林業は、江戸時代にも基幹産業の一つであった。林業史のなかでは、自然林の伐採によるのではない、計画的な植林が極めて早く始まった地として知られている。

こうした地域では、領主側としても土地に賦課する米納年貢のみでは、社会の富を十分に収奪できない。ゆえに、紀州藩は早くから「二分口銀」という流通税的な賦課制度を設けていたことも、注目に値する。

耕地に乏しい尾鷲では、人口の2割分ほどしか米を自給できない。だが商品の売買が活発な港に恵まれたため、諸国から移入することで賄った。農業が凶作であっても漁業による収穫があり、また一時的に村の持山の木を売却して苦境を凌いだ。農作単一地帯に比べて、生産構造が重層的な尾鷲では、江戸時代を通じて餓死者がほとんど出ていないのである。

古文書が伝える熊野古道の旅模様

伊勢から熊野へ向かう巡礼たちの辿った熊野古道が世界遺産に登録され、観光資源として、注目が集まっている。だが、当時の道の実態は、まだほとんど明らかにされていない。『尾鷲組大庄屋文書』には、諸国からの巡礼の様子、彼らを迎えた道沿いの人々、幕藩領主の対応などが、活き活きと詳細に描かれている。

関連事業として、諸国から訪れた人々の旅日記＝道中日記の収集も進めている。これらと『尾鷲組大庄屋文書』の内容を突き合わせることで、旅人の様子も地域の姿も、より具体的に見えてくるのだ。この収集作業も、『尾鷲組大庄屋文書』の調査も、そしてそれらを活用した地元への啓蒙活動も、市民グループと連携して行おうとしている。

地域が真に活性化するためには、住民が主体的に地域に関わっていくためには、地域の価値を住民が正しく認識することが何より大事だ。その活動に大学がどのように貢献できるのか、正念場に差し掛かっている。